

[特集] 文化としての スポーツとツーリズム

特集に寄せて

シンポジウム・ファシリテーター
瀬戸邦弘
上智大学文学部常勤嘱託講師

本特集「文化としてのスポーツとツーリズム」は2016年3月に立命館大学にて開催された日本スポーツ人類学会第17回学会大会シンポジウム「スポーツとツーリズム」で議論された内容を中心にまとめたものである。

そもそも、本シンポジウムテーマである「スポーツとツーリズム」とは、大まかに言って「プロスポーツ観戦者やスポーツイベント参加者と開催地の観光を融合させ、交流人口の拡大や地域経済への波及効果などを目指す取り組み」を指す世界的ムーブメントといえる。

日本においても、観光庁が「観光立国戦略」の一環として産学官の連携組織「日本スポーツツーリズム推進機構（2012年）」を設立し、また、政府の成長戦略「日本再興戦略」においても重要施策の代表例として明示されている。このように政治、経済を巻き込んで、ますます「スポーツとツーリズム」の関心に注目が集まっているところである。

今回、本シンポジウムには観光人類学者、スポーツ人類学者、そして文化人類学者の各立場からの3名の著名な研究者に登壇いただき、それぞれ

の領域における研究成果を披露いただいた。橋本和也先生（京都文教大学）にはマラソンを事例として「パフォーマー・観光者」という新たな概念から論を展開いただき、田里千代先生（天理大学）にはカナダの先住民の「民族スポーツの観光化とその実践」に関してお話しいただいた。そして、相原進先生（立命館大学・非常勤講師）にはアフリカの民俗舞踊の観光化事例から「コーディネーターの役割と民族舞踊の真正性」の問題に注目してお話しいただくこととなった。観光人類学、スポーツ人類学、文化人類学の各領域ではご承知のように、すでに「スポーツと観光」に関する知見が多く蓄積されている。本会ではそれら蓄積をベースとして、各発表者から新たな研究視点をご披露いただき、各発表後の討論会も「談論風発」、活発な議論が展開され、たいへん興味深い展開となった。

本特集をご一読いただくに際し、実際にシンポジウムに参加された皆様には当日の様子をリマインドしていただく機会として、参加できなかった皆様には、当日の「熱」とともに学際的な議論の中に「スポーツ人類学の射程」を感じていただけたら幸いである。

司会：それでは時間となりましたので、これよりシンポジウムを始めさせていただきますと思います。みなさま、お忙しいなかお集まりいただきまして、ありがとうございます。本日司会を務めさ

させていただきます、上智大学文学部の瀬戸邦弘と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

みなさんのお手元にプログラム、および抄録集があるかと思いますが5ページから本シンポジウムに関して記載されております。タイトルは、前方にも書いてございますが「スポーツとツーリズム」となっており、本日は3名の演者の方にお越しいただいております。

シンポジウムの趣旨といたしましては、昨今、日本政府においても「スポーツ・ツーリズム推進基本方針」が制定されるなど、社会の中でますますスポーツとツーリズムが注目されてきております。オリンピックも含めてスポーツと観光を含めたムーブメントと、その広がりの中に身を置き、翻って考えたときに、実は我々スポーツ人類学者や観光人類学者は、その研究の枠組みの中で、すでに「スポーツ」と「観光」を焦眉の対象として研究してきていました。

このシンポジウムでは、我々がこれまで研究目線で注目し続けている「スポーツ」と「観光」について、今、各々が考えているものを披露し、また議論することによって、何か新しい視点・視座のようなものを提供できたら、と考えております。

まず、最初に本日ご登壇いただきます、パネリストの皆さんをご紹介させていただきたいと思っております。皆様から向かって一番左側になりますけれども、京都文教大学の橋本和也先生です。拍手をもってお迎えください（パチパチパチ）。

橋本先生はみなさんご存じの通りであります。私などは御本の著者として先生の名前をずっと見続けていたもので、本物のご尊顔を拝し、興奮を抑えきれません（笑）。橋本先生は、ご紹介するまでもなく、ご存じのようにフィジーなどを中心に参与観察を行い、観光人類学の第一人者という風に申し上げていいかと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

二番目に座っていらっしゃる、天理大学の田里

千代先生です（パチパチパチ）。田里先生はそもそもカナダの少数民族フックライトの研究を出発点とされていて、それ以降は観光文脈における文化の動態に注目されて、世界の様々なところをテーマに民族スポーツとエスニシティの研究を進めていらっしゃいます。

本日、田里先生にはカナダの先住民をキーワードにお話させていただきますが、先生にはそれに縛られず自由にいろんなところに脱線いただいて、思うところをお話いただければと思います。田里先生、どうぞよろしくお願いいたします。

そして、私を飛びまして、一番右側に座っていらっしゃるのが、立命館大学の相原進先生です（パチパチパチ）。相原先生はちょっと異色な方でございまして、日本の民俗芸能を研究しながら、現在ではアフリカの舞踊などについても精力的に研究されています。まさに「博覧強記」、昔の人類学者を地で行くような人かな、と思っています。相原先生は人類学者と同じような視点を持ちながらも、芸能や舞踊を身体文化として紐解く、我々スポーツ人類学者の枠組みとは少し違ったところ、アウトサイダーな視点・視角を持って研究されております。本日はそういった部分を遺憾なく発揮いただき、スパイシーなご意見をいただきたいと考えています。相原先生よろしく願いいたします。

それでは、本シンポジウムですが、最初にパネリストの皆さん、おひとりずつにご自身の発表を頂戴して、そのあとでパネリスト間の質問等、意見交換していただきます。最後に時間を取らしていただいて、フロアとの質疑応答の時間とさせていただきます。それではまず最初に橋本先生にご発表をお願いしたいと思います。

それでは、橋本先生、どうぞよろしくお願いいたします（パチパチパチ）。

「スポーツ観光」研究の提案

— 「パフォーマー・観光者」の視点から—

橋本和也
京都文教大学

京都文教大学の橋本でございます。よろしくお願いたします。「スポーツ観光研究の提案」というタイトルで発表をさせていただきます。ここでは「パフォーマー・観光者」という新しい概念を提案したいと思っております。この概念を取り入れて、どういったことが出来るかということについて少し考えていきたいと思います。

1. はじめに

まずはこの研究をしなければいけないと改めて思いましたのは、2014年8月31日、たまたま北海道におりまして、札幌で「北海道マラソン」と遭遇いたしました。それを見てから、マラソンを本格的に調査しようと思いました。2014年の10月には、大阪マラソンの朝の様子を、早朝に行き、どんなものかを見て、その後神戸マラソンも見に行きました。

そして、去年ですが、2015年は大阪マラソン前日の様子を観て、まさに走る人たちが前日から



写真1 2014年北海道マラソン8月31日

やってきて、宿泊も兼ねているということを知り、マラソン参加者を観光者として捉える視点が、是非とも必要であろうと考えました。

「スポーツ観光研究」という視点から、2007年の東京マラソンをはじめとして、2011年から大阪マラソン、神戸マラソン、京都マラソン、などのシティマラソンが本格的に始まりまして、経済的な効果に関してはたくさん語られるようになってきました（表1参照）。

しかしながら、「スポーツ観光研究」に関しては、実はその成果がほとんど見られないというのが現実であります。それには、どうも理論的な切り口が見つからないということが原因かなと思っております。2012年に発表された東京マラソンの経済波及効果が240億円とか。このような経済効果については一応算出されております。まさに、大きなイベントであることに変わりないのですが、この点だけにスポーツ観光研究の焦点が絞られるのでは、研究に発展が望めないと考えます。

実は研究がなかなか進まなかった原因というのは、私もそうでしたが、アスリートはスポーツのジャンルに属し、そして、観光者は観光のジャンルに属すと、それぞれが違った領域にあると考え

表1 各マラソン大会と経済効果など（2012年発表）

大会名	経済効果	自治体負担	事業費	参加者
東京	240億円	1.47億	18億	3.84万人
大阪	133億円	2億円	13.3億	2.9万人
神戸	59億円	1.5億円	6.4億	2.3万人
京都	40.8億円	4.8億円	6.5億	1.4万人

(Best Value vol.28 2012 SUMMER VMI p.13 より)

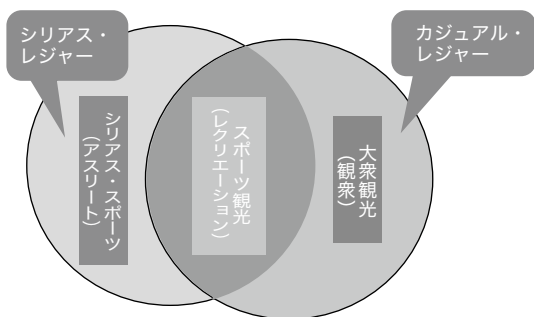


図1 アスリート、レクリエーション、観衆
—別々の領域として設定—

ていたからであります。実はこれまでの観光の分類では「スポーツ観光」というものは「レクリエーション観光」の領域に属していると考えられていました(図1参照)。図のように、これまでは大衆観光とアスリートの領域をそれぞれ分けて分類されてきました。

今回、本格的なスポーツマンが観光者にもなるという、その境界領域である「スポーツ観光(レクリエーション)」に改めて焦点を当てるべきだと考え直しました。この境界領域では、それぞれの本格的な領域がもつ特徴が混じり合っています。これまではほとんど注目されることのなかった、この境界領域に注目すべきであると考えました。そこに見られる混淆した特徴を、今日の発表のなかで、なんとか統合するような、そういう視点が得られないか、という提案でございます。

2. 観光の「まなざし」から「パフォーマンス」へ

『観光のまなざし』というジョン・アーリの有名な本がございます。実はその第3版がジョン・アーリとヨナス・ラースンの共著として出版されました。ラースンが参加することによって観光者の「まなざし」研究では、いわゆる静態的な「まなざし」だけではなく、観光者自らがパフォーマンスを行う観光に、たとえば観光者による写真撮

影行為自体に注目する研究がはじめられました。これを「パフォーマンス論的転回」と観光学では言っておりますが、これではまだまだ今回問題にしたい「スポーツ観光」の問題領域までに広がっていきません。そこで、「まなざし」から「パフォーマンス」というジョン・アーリ、ラースンの両研究者が到達した時点からもう一つ先の、「さらなるパフォーマンス論的転回」というものをここで提案したいと思っております。

理論的研究がスポーツ観光で遅れているのは何故かという、まだまだ試行錯誤が不十分であるということです。その原因として、もうすでにアスリートの研究や、スポーツ・ファンについての社会学的研究がひとつのジャンルとして出来あがっているということがあげられると思います。それなのに、あらたに観光者もその中に取り入れて理論をわざわざ構築し直す必要があるのかというような壁みたいなものがあつたと思います。

新たな展開を促すために、今回、「パフォーマンス・観光者」という新たなジャンルを取り入れた理論構築の必要性を提案いたしております。そうしますと、アスリートのパフォーマンスも、スポーツ・ファンのパフォーマンスも、さらには観光者のパフォーマンスもすべて平等に包含する概念を基盤とした、「観光論的スポーツ研究」を構築する視点というのが成立するのではないだろうかと考えております(図4参照)。

先ほど申しましたように、さらなるパフォーマンスへの転回ということで、「パフォーマンス・観光者」という新たなジャンルを創設すると、そこには「都市マラソンランナー」も、都市マラソンだけでは満足できず、さらに険しいところを走ろうとする「トレイルランナー」も、それから例えば、種目が異なりますが、「サイクリング・ツーリスト」なども含まれます。今日も自転車の話がありましたけれども、ツール・ド・フランスのコースをめぐる「スポーツ観光者」がいます。

日本の踊りでは、「よさこいソーラン祭り」のパフォーマーとして何万人という人が自らお金を払って参加しております。そういう人たちも、やはり「パフォーマー・観光者」として考えたらどうでしょうか。

それにさらにプラスして、今までの大衆観光者なども入れて、それを全部統合したような視点が開けないだろうか、ということでございます。それはすなわち、スポーツ人類学のみならず、観光研究そのものの質を変える可能性があるだろうと考えております。

3. スポーツ・パフォーマンスと真正化

しかしながら、統合はしたものの、その中では、また差異化ということが語られることとなります。参加者による「シリアス・レジャー」と「カジュアル・レジャー」との相違が主張されます。「シリアス・レジャー」についてはこれから詳しく述べますが、プロに近いアスリートとそれからアマチュアとしてただ楽しむだけのパフォーマーがいます。前者は自らのパフォーマンスをとりわけ特別のものと考えようとする傾向があり、それを「シリアス・レジャー」における「真正化作業」と呼んでいます。パフォーマンスそのもの、それが実践される空間そのものを真正化するという作業が、こちらの「シリアス・レジャー」の領域では行われています。しかしながら、それは客観的な真正性の問題ではなくて、主観的または自らの存在をかけた実存的な真正化の方向に向かってまいります。

3-1 スポーツ・パフォーマンスと真正性

ここでスポーツ・パフォーマンスと真正性の問題について少し考えていきたいと思えます。観るという客観的または静態的な、先ほども申しましたが、『観光のまなざし』が対象にしていたのは

観る経験で、「客観的真正性」の方を問題にしていたのであります。それに対して「する経験」、ここで注目している「パフォーマー・観光者」の視点でございますが、そちらは「主観的・実存的な真正性」を問題にします。真正性に関してはこの二つに分類される訳でございます。

それに、「クールな真正性」と「ホットな真正性」と名付けたのはセルビンでございますが、このように2つに大まかに分けて考えられております。それに対して、静態的な真正性ではなくて、「真正化する」「真正性を生成」させていく、そういう「真正化の過程」の問題については、コーエンとコーエンが2012年に議論をしております。

クールな真正化とホットな真正化の問題がございます。クールな方では国家とかユネスコなどの「権威による科学的評価基準」をもとにした真正化が行なわれます。それに対してホットな方は、「パフォーマンス的な実践による真正化」です。たとえば宗教的な信者が礼拝行為を繰り返す、またはスポーツ・ファンが伝説的なパフォーマンスがなされた場所を訪問して敬意を表明するとか、献身的に、自己投機的に、情緒的な表明を繰り返すことによって「ホットな真正化」が行われていきます。この両者の違いが問題になります。

表2 スポーツパフォーマンスと真正

真正性の違い：	
「見る経験」	vs 「する経験」
客観的真正性	主観的実存的真正 (Wang 1999)
クールな真正性	ホットな真正性 (Selwin 1996)
真正化のプロセス (Cohen & Cohen 2012)	
クールな真正化	vs ホットな真正化
静態的傾向	動態的傾向
科学的評価基準	パフォーマンス的な実践
国家・ユネスコ	信者、パフォーマー
認定・許可・登録	礼拝・帰依・敬意表明・献身
	自己投機、情緒的表明

《ホットな真正化の特徴》

- ・実践によって形作られ、強化される
- ・パフォーマンスが信仰を再帰的に強化する
- ・実践者を個人的な「実存的真正性」へ導く（シリアス・スポーツへ）

当然ながら、ここで今回問題にするのは、ホットな真正化の方でございます。それは実践によって形作られ、ますます強化されていきます。パフォーマンスや信仰などですが、それをそこで行うとその場所の真正性が高まり、真正性が高まるからまた人が来る、人が来るからまた真正性が強化されるという、そういう再帰的な強化というのがここでは問題になってきます。実践者を個人的な「実存的真正性」へ導いていくという特徴があります。それを、「シリアス・スポーツ」の方に近づいていくと考えることもできると思います。次に、シリアスなスポーツ観光、または、シリアス・レジャーという枠組みで考えてみます。

3-2 「シリアス・レジャー」と「サブカルチャー資本」

「シリアス・レジャー」については、シップウェイとジョーンズ [Shipway and Jones 2007] が 2007 年の事例を挙げて分析しています。このジャンルには特別な知識、技術、経験が必要になってきます。失敗や困難、辛抱、制限と交渉したりですね、初心者から熟練者へと移行していったり、専門の技を駆使して自己表現、自己実現、社会的相互行為による恩恵とか特典を感じ、そして特別な世界のエートスの共有という特徴があります。言い方を変えますと、ここに属する人々はサブカルチャーグループを形成し、そういう世界内でエートスや感情的価値観を共有して強い社会的アイデンティティを獲得していくという特徴がございます。

事例としては、「キプロス国際四日間遠距離ランチャレンジ」というのがありまして、100 名以上が参加しているということでございます。シップウェイとジョーンズの調査では、一人は走る方を担当し、もう一人は参加者たちを客観的に観る方を担当したそうであります。特徴として、トレーニング期間中はシリアスで孤独な準備をすることがあげられています。このトレーニングをしな

いと、とてもではないが完走できません。プロの仕事のような性格が反映されていたといます。ここに「シリアス・レジャー」と一般的な「カジュアル・レジャー」との差別化がはっきりと見られます。

次に、「サブカルチャー資本」です。ランナーとしてのアイデンティティに関して、まさにこのサブカルチャー資本の提示とか誇示とかが行われます。これはキプロスでも、また他のマラソン大会などの初期の段階でもよく見られる情景です。走る前の段階では、前回大会のロゴや記章が入ったシャツなどを着まして、これまで自分がどういう大会に参加したかという語りをそこで沢山するわけです。

しかし、不思議なことにほとんどの大会では、走り終わった後は家族や仕事などについて語り合うことが多くなったといます。しかしながらキプロス大会においては、全期間中も、それから終わってあとも、シリアスな、ほとんどプロフェッショナルなランナーとして対応していたと記録されています。彼らは、ランナーとして価値あるアイデンティティの獲得と維持のために、努力と忍耐を怠らず、大会参加、そして完走することを何よりも優先するそうです。そのためにトレーニングをしっかりし、スケジュール管理をする。ケガももちろんあるし、思わしくない結果やスランプもありますが、そのような事態に対しては、どのようにしてサブカルチャーグループの中での自分を維持するかということに腐心するそうです。

トレーニングも過酷ですので、家族サービスができず、夫婦関係が悪化し、離婚に至る例もあるそうです。なぜ、ケガをしても最後まで走り通すのかという疑問に対しては、まさに、ランナー集団における大切なサブカルチャー資本を獲得し維持するために走るといえましょう。彼らにとってはそれが非常に重要な事柄になっている

表3 シリアス・ランナーの位置と特徴

(サブカルチャー資本)	
非ランナー	vs ランナー
↓	
↓ (シリアス・ランナー vs カジュアル・ランナー)	
「非ランナー」：フィットネス不足、カウチ・ポテト、 忍耐・技術のいる活動への不参加者	
《シリアス・ランナーの特徴》	
継続することで得られる恩恵：高揚した感覚を経験、 「自尊心で一杯になる」、誇り、自己評価	
＜個人的挑戦を進化させ打ち勝つ達成感、自己評価、 身体的・精神的健康、減量、幸福感、興奮・アドレナリン、 誇り、痛み・消耗感の克服、スピリチュアリティ、心・身体・精神をテストする、自由、 場所・場に特有の魅力、個人的パフォーマンスの強化、 非攻撃的競争など＞	

のです。

「シリアスランナー」の位置づけとしましては、まず、非ランナー（＝走らない連中）とランナーを分けて、ランナーの側に属し、そして、さらにレクリエーションで走るカジュアルランナーとシリアスランナーとを分けて、後者のシリアスランナーの側に属します（表3参照）。単なるレクリエーションで走るのは、フルマラソンではなく3キロのファンランなどのカジュアルランナーのグループに分類されます。

シリアスランナーは、非ランナーを「フィットネス不足で、カウチポテトだ。忍耐、技術のいる活動へ参加しない連中だ」というふうに批判して、自分をそうではない方の側に位置づけます。何が怖いかというと、非ランナーの方に自分が「墮ちていく」ことですね、それが怖いんですね。ですから怪我をしても参加する。怪我をして途中棄権をした場合でも、「怪我を押して走り、棄権するまで走った」というその過程をちゃんと語ることができることが重要であります。彼らにとって「非ランナーと私は全然違う」という矜持が大切に、棄権までの過程を語れるというところに大きな違いを感じていると言えましょう。

シリアスランナーが継続することで得られるものとして、高揚した感覚や終わったあと自尊心で

一杯になることだそうでございます。また、語りや誇りや自己評価、そして個人的挑戦を深化させ、打ち勝つ達成感や身体的健康、減量・痛み・消耗感の克服などのために個人的パフォーマンスを強化し、競争に臨むそうです。

4. 「パフォーマー・観光者」と「経験の真正化」

次は、真正化の過程です。ひとつお断りしないといけないことは、大衆観光では、その真正性や文化の真正性、特に「客観的な真正性」が問題にされないということを、まず大前提としてご承知おきいただきたいとおもいます。これは私の定義ですが、大衆観光とは「観光者にとっての、異郷において、よく知られているものを、ほんの少し、一時的な、楽しみとして、消費することである」と考えています。これが大衆観光の大きな特徴です。

さらにもう一つは、よく知られているものならば、本物でなくても、すなわちここでいう真正なものでなくても、まがいものにもまなざしが向けられることです。面白ければ楽しみ、楽しければ、話の種になるならば、まがいものにも観光者はまなざしを向けております。これが今までの大衆観光でした。

しかし今回、スポーツ観光における「真正性」を問題にすることになるわけですから、立場をガラッと変えないといけなくなります。ここで、スポーツ観光における「パフォーマー・観光者」を対象にするときに、「真正性」に関して大きな転換がなされます。

スポーツ観光者、とくに「パフォーマー・観光者」の経験と、その「観光経験の真正性」を研究するには、これまでの大衆観光とは概念を大きく変える必要があります。「ホットな真正化」の理論のもとづいて、観光者にとっての「真正性」とは何

かということにあらためて視点を置きますと、今までの大衆観光の研究とは領域を異にすることになります。「ホットな真正化」は、観光者自身による集合的なパフォーマンスな行為を通してなされます。

そして、それは繰り返し行われ、非公式で自己強化される極度に主観的で、結局自分が問題ですから、客観的な真正性に関する他からの異議を受け付けません。「パフォーマンス・観光者」が形成する観光的コミュニティを背景にして、またはこれをさきほどはサブカルチャーグループと申しましたが、そういうものを背景にして真正化の作業が行われているのです。

4-1 「ツール・ド・フランス」の事例—空間の聖化—

皆さんもご存じだと思いますが、1903年に開始され、3300キロメートルを3週間にわたって、20数チームで競われるサイクリングの大会です。テレビ視聴者は1億人で、沿道には1200万人から1500万人が集まるというイベントでございます。山岳ルートが導入されると決着がそこでつくことになり、山岳地帯の重要な場所がどんどん「聖化」されて「真正」なものになっていきます。1910年ピレネー山脈、1911年ガリビエ峠、そして1952年になると21のヘアピンカーブがあるラルプ・デュエズが加わりました。まさに、アルプスとピレネーがツール・ド・フランスの勝敗を決する場となりました。

そうなる夏場にやってくるファンが、先ほど申しました、信仰的帰依に近い興奮をそこで味わい、山頂のコミュニティが出現する様子が見られます。ヴァントゥ山やラルプ・デュエズの坂を自ら自転車で漕ぎあがるツアーが、実際に催されることとなります(Lamont 2014)。

スポーツ観光者が、アルプスという真正なツアー空間のなかで、ステータスを獲得する行為とし

て、そこに行き、そこを自ら自転車で登るという経験をしています。それがまさにホットな真正化の過程そのものになります。「パフォーマンス・観光者」によるアルプスの真正化は、大会において有名な2つのアルペンルートであるガリビエ峠とラルプ・デュエズを、ツアー企画者とファンが訪問し、登坂するというパフォーマンスによって、すなわちまさに文化的な仕業によって、実現されているのであります。そしてそれが繰り返されることにより、真正性の強化・増幅が行われます。これが、ホットな真正化のプロセスであります。

ファンによるパフォーマンスな実践が集積されることにより「多くの選手たちの聖堂」となり、その選手たちがそこを駆け上がったという事実によって正当化・真正化され、サイクリングファンのメッカとなっていくのであります。そこでは本当のアウラ(神話的感覚)が喚起されていきます。

4-2 パフォーマンスによる真正化の過程

以上の事例を、コーエンとコーエン(Cohen & Cohen 2012)による「真正化の過程」についての議論から分析することができます。観衆のパフォーマンスな行為がホットな真正性を強化していくという視点です。アマチュアがこのバスツアーで聖地を訪問し、尊敬する英雄を真似て追体験をすると、自身の苦痛経験を通して、英雄が本当に素晴らしい偉業を達成しているのだという謙虚な感情を抱いて選手を称賛するといえます。ツアー参加者たちのコミュニティ(分かち合う達成感)が醸成され、そしてこういう雰囲気「サイクリング・サブカルチャー」を構築し、支えて、称賛するようになっていきます。さらにはメディアによってランドスケープが真正化される過程も加わります。聖なる場所との遭遇の真正性が、メディア戦略を通してどんどんと深化されていきます。

パフォーマンスな真正化の過程として、パフォーマンスによって真正なる場所がこのように創

出されています。感情的、感覚的、情緒的関係性が深くなるほど、ますます真正化が強化され、増幅されていきます。そして、アルプスというその場所ですら実際に行われたパフォーマンスの特性が蓄積されていきます。「運動感覚的負荷」（とても大変な思いをして登ること）と不屈の精神、それをなんとか乗り越えたという達成感などが、その場所の特性となっていく（Lamont 2014）。それが「実存的真正性」の感覚を誘発し、真正なる自己を確認する作業に寄与していると言えると思います。

ホットな真正性を保持するためには、パフォーマンスが継続的、恒常的に再演されることが必要になります。スポーツの場の写真、動画または感想が、現在はすぐにメディア、SNSなどに掲載されます。それが真正なる場所やステータスの強化、永続化に結びついていき、「サブカルチャー資本」の獲得ということになっていくと思います。

5. まとめ

まとめでございます。1番目に、観光が「パフォーマー・観光者」という新たなジャンルを自ら引き受けるということは、スポーツ観光者が自らのアイデンティティを獲得する契機を提供することになります。そして、2番目に、スポーツ観光者は、日常世界で疎外されている自己が、他の領域で真正性を実現している他者を（スポーツの世界で）探し出すという意味で、マッキヤーネルが語った「近代の観光者」と通じることになります。

マッキヤーネルのいう「近代の観光者」は、自分が現実社会の中で疎外されておりますので、どこかにその真正なる自己を実現している人や場所があると想定して、それを求めていると考えられています。

スポーツ分野における「パフォーマー・観光者」は、例えば、伝説的な山岳登坂などに挑戦するこ

とで、自ら実存的な真正性を実感しようとしています。そしてその行為自体が、今度はフランスアルプスという「聖地」の真正性をホットに強化し、増幅する役割を担っているということになります。これまで述べたように、本発表では観光者自らがパフォーマンスを行うことを目的とする「スポーツ観光研究」への理論的な展望を拓くための試みを行ったと言えると思います。

最後に、ちょっとしたアナロジーと言いますか、「スポーツと観光」研究と「宗教と観光」研究との比較をしてみたいと思います。最初の私の考え方は、図2のように、まがいものでもまなごしを向ける観光を「大衆観光」の側に設定し、そして宗教的観光で「宗教・巡礼」を「真正なもの」の側に設定しました。「真正なもの」への信仰は宗教の領域に入りますので、巡礼ではもしもその対象がまがいものだと分かったならば、その途端に真正性を基準にしたこちらの信仰は成立しなくなります。それ故、観光と宗教は、真正性を境にして対立するものだと設定しました。

しかし現実には、この境界領域である「宗教的観光」として、観光者も宗教的な「聖地」を訪ねております。また巡礼者も信仰のつもりで行くのですが、そのついでに観光的な楽しみの場所にも行くというのが現実でございます。「宗教的観光」の実態を調べるためには、まさに図2のこの境界領域ですね、この境界領域に焦点を絞って研究しなければいけないという提案を最初の『観光人類学の戦略』では行ってはいたのですが、読者はなかなかそのようには受け取ってくれませんでした。

私が観光と宗教を分けて考えているとの批判を込めながら、筑波大学の宗教研究者山中弘さんは、「宗教的観光」「宗教的ツーリズム」という概念を提出しまして、宗教研究の立場で現代の宗教の観光的要素に焦点を当て、いわゆる「宗教的ツーリズム」のほうから宗教的なものを炙り出した

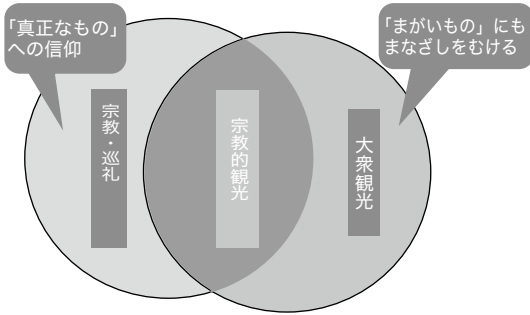


図2 宗教的観光と大衆観光
—別々の領域として設定—

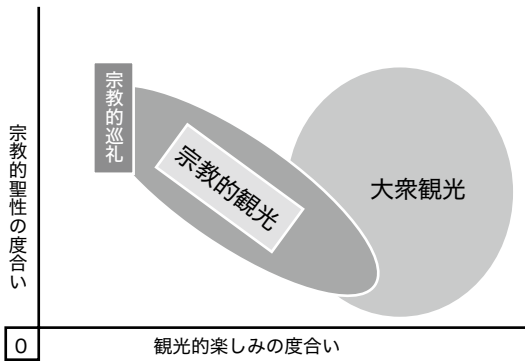


図3 宗教的観光

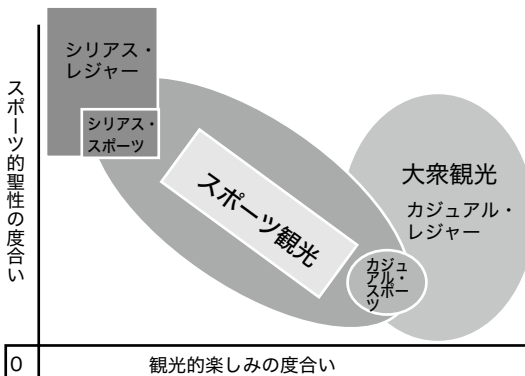


図4 スポーツ観光

—「スポーツ」と「観光」を同一軸上に設定—

いという立場にたつての研究会を始めました。私も彼の研究会のメンバーであります。彼はそれを度合いの違いとして、観光的な楽しみの領域と宗教的な領域はもともと同一領域に共存するもので、場合によってどちらかの度合いが強くなるのだと考えるように提案しています。観光と宗教を一つの領域で考えていこうという立場を近年、『宗

教とツーリズム』という本のなかで提案しています。

山中さんの提案を受けてということでございますが、宗教と観光の関係を図2から図3へ変更しました。そしてその変更をスポーツ研究に応用いたしますと、図1から図4への変更が行われることになります。最初、私は図1のように観光とスポーツの領域を分けて、スポーツと観光のそれぞれが混ざり合う領域に「スポーツ観光」があるというふうに設定していたんですが、今回は図4の方に変わって、「スポーツ観光」という一つの大きな領域がまずあり、それには度合いの違いとして「カジュアル・スポーツ」もさらには「シリアス・スポーツ」も含まれる。スポーツ観光の領域を広くとっております。

この領域から外れているのは、実はプロのスポーツであります。本発表は、あくまでも「シリアス・レジャー」「カジュアル・レジャー」というそのレジャーの領域の中の問題に焦点を当てております。スポーツ観光の中で、たとえばマラソンで「アンダースリー」を目指す人がいますが、かれらはアスリート並みではありますが、プロではございません。「シリアスランナー」として「スポーツ観光」の領域に入れて考えております。ほんのちょっとだけ、かじるだけの人たち、それを観るだけの人たちも、この領域の中で大衆観光と「カジュアル・レジャー」と重なる部分にはあります。相当広い領域でスポーツ観光を考える必要が出てきます。

それを考えるときに、こちらのほうの一つの特徴として、「経験の真正化」というものが理論的な枠組みとして提案できるのではないだろうかと考えます。ちょっと長くなりましたが、以上でございます。どうもありがとうございました。

【参考文献】

Cohen, E., & Cohen, S. (2012) 'Authentication: Hot and Cool'. *Annals of Tourism Research* Vol.39 No.3, pp.1295-1314.

Lamont, M. (2014) 'Authentication in Sports Tourism' *Annals of Tourism Research* Vol.45 pp.1-17.
 Selwin, T (1996) 'Introduction' in *the Tourist Image: Myths and Myth Making in Tourism*, Selwin, T. (ed) pp.1-32 John Wiley & Sons.
 Shipway, R. and Jones, I. (2007) 'Running Away from Home Understanding Visitor Experiences and Behaviour at Sport Tourism Events' *International Journal of Tourism Research* 9, pp.373-383.
 Wang, N. (1999) 'Rethinking Authenticity in Tourism Experience' in *Annals of Tourism Research*, 26(2) pp.349-370.

Urry, J & Larsen (2011) *THE TOURIST GAZE 3.0* Sage Publications. [加太宏邦訳(2014)『観光のまなざし』(増補改訂版) 法政大学出版局]
 橋本和也 (2016) 「スポーツ観光研究の理論的展望—「パフォーマー・観光者」への視点」『観光学評論』Vol.4-1, pp.3-17。

司会：ありがとうございます。それでは続きまして田里先生の発表をご準備ができ次第、お願いしたいと思います。

カナダ先住民の民族スポーツとツーリズム —民族スポーツの実践による文化理解の可能性について—

田里 千代
天理大学

田里です。よろしくお願いいたします。橋本先生のお話を受けている部分としましたら、パフォーマーという、スポーツ実践をするという点で共通の話題を提供することになるかと思います。一応、さきほどのシリアスとカジュアル・レジャーとしてスポーツに関わる部分では、この後のディスカッションの部分で全く違う事例を橋本先生にご紹介しながら、橋本先生のご意見を頂戴できたらと思います。

1. はじめに

まず、先住民の民族スポーツとツーリズムというところで、お話をさせていただきたいと思います。先ほどのパフォーマーを、民族スポーツを実践する観光客とし、その実践と通じた異文化理解の可能性についてお話をしていきたいと思います。その中で、先ほどの発表で多々ありました、シンボルマークのような関連することも出てきます。

スライド①では、まさに先ほどのロゴの問題とも関わってくるような先住民アートが、カナダという国の玄関口である空港のターミナルにあります。現在、カナダにおいて先住民の工芸品をアートとしながら、国民文化としている状況にあると考えます。そのようなことも、この中でもお話をさせていただきたいと思います。

まず初めに、これまで私が研究をやってきた中では、民族スポーツを他者の文化に属する人たち



<スライド①>



<スライド②>

が実践をすることに注目してきました。スポーツ実践として、いわゆる白人のカナダ人たちは、中華系のカナダ人の人たちがやっていたようなドラゴンボートレースに参加していくことを取り上げます。今では、コミュニティスポーツとして大会には白人たちが非常に多く参加しています。そのことは、カナダにおいて多くの中華圏の移民の人たちがいることに対して、白人たちの中には嫌悪感を覚える人たちも多い状況です。そうした中で、中華系の民族スポーツを実践することで白人たちが他者の文化を理解していく、そのような状況が見えてきました。このような研究を観光文化に活用してみようというのが今回の発表の主題です。

今回のシンポジウムにあたって、橋本先生の著書などを参考に勉強させていただきました。なかでも、観光客が物語を構築していく、その過程をみていくことも重要であるという視点について考えていきたいと思えます。一つは、観光における民族スポーツについてですが、観光地に行った先の土地に暮らす人々、つまりその文化に属する人々がやっている、実践している民族スポーツを観光客も一緒にやってみるこの意味についてです。

民族スポーツの実践によって物語が構築されていく、と考えてみましょう。そのことは、身体を通じたこちら側からあちら側、今日のお話でいう



図1 カナダ地図

(カナダ観光局【カナダ観光地図】(日本語) <http://www.canada.ca/ja/ineo/meo.html> より抜粋)

<スライド③>

と、カナダの先住民の側に入り込めるのではないかと考えます。先ほどサブカルチャーというお話がありましたが、コミュニティスというところで、民族スポーツを実践することで向こう側の立ち位置に通じて行けるのではないかと、そうした視点からの研究ができるのではないかと、観光学を応用させるような研究を考えているところです。その一つにドラゴンボートレースがあります。各コミュニティで行われている、いわゆるコミュニティスポーツとして夏場には非常に人気があるものです。スライド②のように、いわゆる白人の人たちの参加が非常に多いスポーツです。

今日の話題としているカナダの概況ですが、西海岸と平原地域のアルバータ州に限定をさせてお話をさせていただきます。スライド③に地図を示しました。

2. カナダ先住民の民族スポーツとツーリズムの変遷

2-1 演出としての民族スポーツ（植民地的観光）

まず、カナダ先住民の民族スポーツとツーリズムの変遷についてみてみましょう。最初は白人の植民地的な枠組みの中で、白人たちが喜ぶよ



<スライド④>

うな演出の一つとして先住民たちが取り込まれていった過去があります。その事例として、ロッキー山脈にあるバンフという観光地として非常に有名な場所で、「バンフ・インディアン・デイズ (The Banff Indian Days)」というものが行われていました。

これは鉄道会社がそこに観光客を呼び込むためにアトラクションとして、周辺の先住民の人たちに集まってもらうイベントです。

そこで様々な催しが行われますが、パレード、弓の競技、競馬、綱引きなどのスポーツを見せています。競技をしている先住民たちを周りで白人の人たちが観るというスタイルでした。それは、バンフの自然は、白人たちの来る以前のありのままを残しており、そのありのままの自然の一部を構成する演出のために先住民が使われたのです。こうしたことは、現在では観光学の中でも、先住民が白人の楽しみのために使われていたことは、批判はされています。

このインディアン・デイズは、その後1928年に一旦途絶えます、これはアーカイブ史料の中で、ネットで見ることができますが、スライド④には競馬が行われている様子の写真を示しました。このスライド⑤は1903年から1942年ごろのもので、これは、アーチェリー、弓矢ですが、獲物に見立てた張りぼてのシカに矢を当てる、そういう



<スライド⑤>



<スライド⑥>

ような競技です。いったんは批判を受けたこのイベントですが、2004年に周辺の先住民自らが復活をしよう、という動きによって変わってきています。それを定期的に行うというようなことが起きています。

その部族の組織のリーダーたちが、次の世代に伝統を継承するために、従来やっていたようなイベントが必要であるということで、伝統の継承を目的としたイベントとして復活をさせています。ですから、伝統文化をめぐる現代の文脈において、再び自らが必要であるという認識で、かつては批判をされていたようなものが違う枠組みで再評価され、実践に至っています。それを観光として外に宣伝し、観光客を呼び込むというところまでは実は至ってはおりませんが、これも今後、観



写真6 カナダ・ウィクトリアでのFirst People's Festival (2001):ハイダのダンス(渡邊撮影)

<スライド⑦>



写真7 到着ロビーでの先住民アート(渡邊撮影)

<スライド⑨>



写真6 バンクーバー国際空港の出発ロビーに展示されている先住民アート(ハイダ)(渡邊撮影)

<スライド⑧>



写真8 Head-Smashed-in Buffalo Jumpのダンスのイベント: ブラックフットのバウワウの始まりの儀式に参加する観光客 (2011年:渡邊撮影)

<スライド⑩>

光と絡めてみていくと面白いと思います(スライド⑥)。

2-2 民族スポーツの表象(鑑賞型観光)

それ以降については、観光の資源として先住民のスポーツを白人の都合で利用したことへの批判と反省に立って、1980年代以降については、先住民文化のイメージの抱かせ方を変えていく方向になりました。これは、先ほどご説明したように、バンクーバーの国際空港に先住民アートがオブジェとして至る所に飾られており、例えば出発、到着ロビー、待合室、フードコートなど、あらゆるスペースに先住民アートが飾られているような印象を受けるところです。この先住民の新たなイメージが付与され、それまでの先住民の印象を変化

させてきました。

それは、1つは工芸品と先ほども言いましたが、工芸品を先住民アートという価値づけを付与させて、先住民自体へのイメージも変わっていきます。これは、非常に高額な値がつくアートとして白人の人々が購入していく、それを製作して売るのは先住民ということで、その位置づけもイメージも変わっていきます。

その中で、スポーツと関連するところでは、コミュニティイベントでのダンスの披露とが各地で見られるのが1990年以降で、盛んにそういったことが行われていきます。そういったアートと同じような形で、非常に色鮮やかな羽をつけて髪飾りをして、衣装を着て様々なイベントでダンスを踊ることが行われていきます(スライド⑦)。



写真9 ブラックフットのダンス(渡邊撮影)

<スライド⑪>



写真11 ブラックフットの踊り2(渡邊撮影)

<スライド⑬>



写真10 ブラックフットのダンス(渡邊撮影)

<スライド⑫>

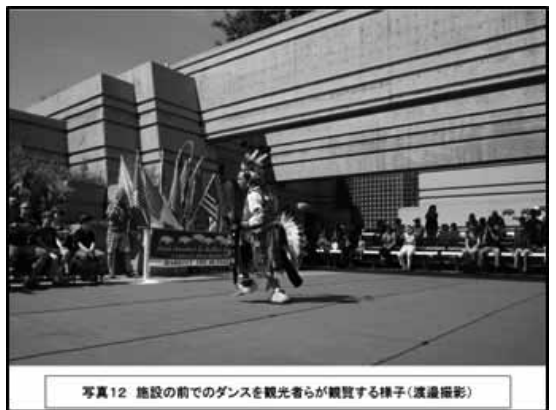


写真12 施設の前でのダンスを観光客らが観覧する様子(渡邊撮影)

<スライド⑭>

ただし、この段階においても、やはりこちら側からあちら側を觀賞するという関係性は変わらずありました。

スライド⑧は2001年の時の様子ですが、先ほどのバンクーバー国際空港で置かれている先住民アートの一つです。カヌーの彫刻で非常に大きなものが置かれています。これは、カナダ自体がまさに先住民のイメージを変えながら、むしろ先住民自体を、カナダを象徴する国民文化的なものに変容させていくような発想が表面化しているものではないかと思えます。スライド⑧は出発ロビー、スライド⑨は到着ロビーです。本当に至るところに、そうした先住民アートが飾られているわけです。

今日お話しをしたいところの、先ほどの橋本先

生の「パフォーマー」というところで切り取れるかどうか、後ほどまた伺いたいのですが、これは楽しみという要素もそうですが、いわゆる学習型の観光ではないかと思えます。

2-3 民族スポーツによる文化理解(学習型観光)

次に事例としてお話しするのは、「ヘッド・スマッシュド・イン・バッファロー・ジャンプ(Head-Smashed-In Buffalo Jump)」という、いわゆる博物館で、観光者向けの教育施設的な要素を持つ施設です。

この施設のある辺りは、バッファローの生息地で、平原地域の小高い崖を使って先住民たちは狩猟をしていました。仲間と共にバッファローを崖っぶちに追い込んで、そこから何百頭ものバッフ



写真13 観光客らを入れたダンス(渡邊撮影)

<スライド⑮>

アローを崖から落としていました。崖の下でさばき、肉を分配したりした跡が多く、骨とともに残っています。そうした地域の紹介を周辺に暮らしていた先住民の暮らしも併せて展示をしている施設です。この施設は、カナダのアルバータ州の観光スポットの1つにも挙げられております。ここでは、学習型観光として、展示品を見ながら周辺に暮らすブラッドフット族の人々の話を聞きながら、イベントなどでは民族スポーツを行うことができるようなアクティビティもあります。

先住民らがダンスを披露し、ダンスの意味を解説してくれます。最後にはみんなで踊ったり、バッファローに投擲、矢を投げたり、バッファローの的に向けて矢を射るようなゲームをしたりします。昔ながらの手遊びなども子ども達に教えます。それは観光の一部として、観光者が実際に一緒にやってみるといことが学びにつながっていく、そんな理解かと思えます。そこで、ダンスを披露するだけでなく、ダンスの前の儀式的なところから、そこに訪れた観光者を取り込んでいきます。観光者らは旗を掲げながら入場し、先住民であるダンスパフォーマーたちも一緒に入場します。これはパウワウと呼ばれる儀式で、このような入場のやり方をするとという解説が入ります(スライド⑭)。そのあとに、ダンスが披露されます。ダンスが披露されている間は、周りで観光者らが写真



写真14 先住民らによるカヤックツアー Takaya Tours HPより
(<http://takayatours.com/canoe-tours/>)

<スライド⑯>

を撮ったりしています。

ここだけを切り取れば、いわゆる従来通りの観光型かもしれませんが、最後には観光者を輪の中に招き入れて、みんなで踊ります(スライド⑮)。このようなことは、ダンスだけではなく、先ほども言いました、観光者が一緒に昔やっていたような槍を投げたりだとか、あるいは実際にバッファローの肉のハンバーガーを食べたりだとか、そのようなことをしながら、一日のイベントとしてプログラムが組み立てられていることもあります。

もう一つは、先住民たちが運営するツアー会社があり、そこでの民族スポーツを実践していくものがあります。これはバンクーバーの近くに暮らす北西の沿岸部の部族ですけれども、彼らが立ち上げたツアーの会社には、2時間、3時間、1日ツアーあるいは3日間のキャンプを伴うようなプログラムが企画・運営されています。そこではカヌー、カヤック、ウォーキングを含めて、彼らが暮らしていた土地のガイド、すなわちその地域に暮らす先住民の人たちがガイドをしてくれながら、自然学習的な内容についても学ぶことができます。

スライド⑯は、ホームページからの写真ですが、彼らの伝統的と言われるような先住民アートで見慣れてきている、そういった装飾が施されているカヌーとパドルを漕ぎながら周辺地域をめぐる

いうツアーになっています。

3. おわりに

民族スポーツ実践による観光経験の変遷をみると、先住民の人たちが暮らしていくなかで、1つは地域文化観光として民族スポーツをツアー化していく。そのツアーの中では、住民である彼ら自身がガイドとなって説明をする点に注目する必要があります。これは観光する人にとってみれば、そこでのガイドが先住民であることが真正なるものということになりますし、新たな発見にもつながります。これを可能にするのが学習型の観光という位置づけになります。ただ単の観光ではなくて旅に変えていくというような、そのような表現を橋本先生がされていますが、まさに新しい発見をする旅に誘うことが、身体を通じた、まさに民族スポーツの実践から可能になるのではないのでしょうか。それが2つ目に挙げられるかと思えます。

3つ目はホスト側の物語による働きかけによつて、これも橋本先生が著書で言われていることですが、観光者の好奇心が観光者の物語へと変換していく。それは身体を通して実践していくことで、こちら側からあちら側に越境するのではないのでしょうか。現地に住む人たちの中に入っていく行為につながるのではないかと考えます。こちら側からあちら側に越境していく真摯な実践と捉えることができます。ここでは何が本物で何がまがい物かということを問題とするのではなく、お互いの真摯な今の関係性が築かれる可能性があります。

民族スポーツの実践を通してだからこそ、そうした関係性が築かれやすいのではないかとということが考えられます。したがって、こちら側からダンスを眺めるだけではなく、民族スポーツを実践する、ダンスをするパフォーマーたちの属するあちら側に越境する。観光をしていると、そこに暮らしている人たちの生活に入り込みたいという欲

求を抱く観光者も多いのではないのでしょうか。現地の人だけが知る、現地の人がよく行くお店に行きたいという欲求は、民族スポーツの実践にも当てはめて考えることができそうです。現地の人がかやっている固有の民族スポーツを通じて、あちら側、あわよくばホスト側のスタンスに立ってみたい。そうした欲求を満たすものとして、民族スポーツというものがあるのではないかと考えます。

観光を終えて、その話を友人らにするとき、「私は向こうに行って向こうの文化を学んだ、実際にやってみた、体験してみた」とある種、自慢といえますか優越感というもの得ます。そうした経験は、旅の物語として築かれていくのではないのでしょうか。この辺りの話は、先ほどのカジュアルとシリアスに関連した、全く別の事例で考えてきたので、一旦ここで終わりにしたいと思います。ありがとうございます。

【主要参考文献】

- スミス、バレーン編 1991『観光リゾート開発の人類学：ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』（三村浩史監訳）勁草書房。
- 田里千代 2008 「民族スポーツの実践による他者文化の受容：カナダにおけるドラゴンボートフェスティバルの事例」『天理大学学報』Vol.59. No.3. pp.9-20。
- 橋本和也 2011『観光経験の人類学：みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐる』世界思想社。
- ブルーナー、E.M 2007『観光と文化：旅の民族誌』（安村克己・遠藤英樹他訳）学文社。
- Drees, Laurie M. 1991 “The Banff Indian Days” *Native Studies Review*. Vol.7. No.2. pp.76-95.
- Mason, Courtney W. 2008 “The Construction of Banff as a ‘Natural’ Environment: Sporting Festivals, Tourism, and Representations of Aboriginal Peoples” *Journal of Sport History*. Vol.35. No.2 pp.221-239.

司会：ありがとうございました。それでは続いて相原先生よろしくお願ひいたします。

—PCトラブル—

相原：すいません。パソコンが再起動されたみたいで……私のファイルが消されたかもしれません。

司会：こういうときに問われるのは、司会者の力と存じておりますが……（笑）。今、お二人の先生にお話しいただきまして、橋本先生におかれましてはコミュニタスというような、刹那的な空間の中で形成される共有感みたいなものを、そして田里先生は1つの事例の中で、段階を追っていろんな側面が出現してくる様子をご披露いただきました。ホストとゲストの関係とか、物理的とか役割分担とか、そのような観光におけるスポーツ実践をいかに捉えていくかということなのかと思います。お二人の話で共通・共有していたのは、「実践」するということと「体験」するということ、二種類の「当事者性」がそこには存在し、状況によって役割を変えながら、また横断しながら存在する様相かと思います。

これからお話しいただきます相原先生にも、この辺に目配せいただきながらお話しいただけるのではないかと期待をしております。準備できましたようなので、それでは、相原先生よろしく願いいたします。

■相原進先生の発表分に関しては、本号11ページ「研究資料」をご参照ください。

シンポジウム討論会

司会：ありがとうございました。それでは、お時間もだいぶ押してまいりました。よくシンポジウムなどに参加すると、自分たちの言いたいことを言いつばなしで終わってしまうことがあります。でもそれでは寂しいので、これから、各パネリストの先生方にご自身発表ももちろんで

すけれど、しっかりお互いが共通のテーマを持って興味あること、知りたいことを意見交換し質問し合う。そういったことができればと思っております。

お話を終わったばかりで大変恐縮なのですが、相原先生からまずは橋本先生への質問というかたちでもよろしいでしょうか。大丈夫でしょうか。よろしく願いいたします。

相原：やっぱり私のほうで真正性ということで、橋本先生とは違った視点、質的に違う題材をテーマに橋本先生のモデルに別の方向からアプローチできるんじゃないか、というような形でやらせていただいたんですけれど、正直なところ、これをどのようにお感じになったのかというところを聞かせていただけると幸いです。

橋本：舞踊などで、おっしゃることは全くその通りで、それぞれの真正性に関しては、それぞれ提供者の立場とそれを受ける観光者側、ゲストとホスト、それぞれの立場からの真正性についての評価があります。または、真正性なんかもとと求めていないという立場もありますよね。ですから、それぞれの立場のそれぞれの文脈の中、個別の文脈の中で、真正性がどのように語られているか、それをしっかり見ていくという、相原さんがまさにやった、そのアプローチの仕方が実は求められています。一般的にどうだというような、個別のそれぞれの文脈を無視した一般的な話というのは、多分成立しないのだろうと考えております。

相原：ありがとうございます。

司会：それでは、田里先生から橋本先生へご質問がございましたら宜しく願います。

田里：シリアス・レジャーからカジュアル・レジャー、あるいはカジュアル・レジャーからシリアスになっていく、そのような差別化ということが、シリアス・レジャーのほうで見られる事例は、橋本先生の「キプロス4日間遠距離ラン・

チャレンジ」の事例として挙げていただきました。特別な技術・知識・経験が必要となってくるようなシリアス・レジャーはカジュアル・レジャーからの差別化を図るというご説明がありました。

逆にカジュアル・レジャーのままにとどまっているようなスポーツの事例はあるのか気になります。私も少し別の事例で先生にお話をお聞きしたいと言ったのは、「ご当地スポーツ」についてです。それは、やはり地域文化の中でスポーツを活用して地域の活性化を図る、あるいは地域を特徴づけるなかで、ご当地スポーツのようなものが日本各地で見られます。例えば温泉だと、スリッパ卓球みたいなものであるとか、あるいは枕投げ大会みたいなものもあります。それは経済的な活性化なのですが、徐々にシリア

スというか、ルールも細かく定められていくような傾向がみられるのです。

先日、京都の京田辺の商店街で、「いすー1グランプリ」という催しを見に行きました。それを見ると、どうもカジュアルのままにとどまっているのではないかという印象を受けます。いすー1グランプリと言いまして、事務椅子を使って、四角に囲まれた商店街、1周180メートルを2時間で何周まわることができるかという耐久レースです。コーナーが多いため、転倒するとかのアクシデントが多々あり、そこが見ていて面白いポイントにもなってきます（スライド⑰）。

乗り方は自由ですので、必然的に後ろ向きになるのが一番楽な姿勢のようで、後ろ向きでレースをすることが多いですので、スライド⑱、



<スライド⑰>



<スライド⑱>



<スライド⑱>



<スライド⑳>

⑱のように大変カジュアルな印象を受けます。コスチュームも着ながらやる人もいますが、なんせ2時間なので非常に苛酷なレースです。これはもう真剣にやっている様子です。その中で、みんな真剣に取り組んではいるのですが、時に非常にシリアスな人が登場します。出場経験があり、今回で7回目となるアマチュアかどうか定かではありませんが、自転車チームが参加しています。彼らは、特別な技術や技を使いながら、横向きになって片足でこぎながら参加者の間をすり抜けていく、そういう独自のスタイル(スライド⑳)を繰り返します。

非常にシリアスな印象を与えますが、やはり違和感があります。カジュアルなままでとどまっていることは可能なのかどうかというか、ここでの違和感は何なのだろうと言うようなことを、ご当地スポーツの可能性も含めて、先生のご意見をお聞きしたいと思います。

橋本: 今の話で1つ問題だったのは、カジュアルかシリアスかという二項対立的な分類をしていることだと思います。カジュアルなままがいいじゃないかと思いつつ、真正性の、客観的な真正性の話からみれば、どちらなのだろうか疑問を感じたということだと思います。しかしながら、まさにこのように生成されていくスポーツとして認められることになるかと思いますが、これに関しては二項対立で見ると、「真正化」という真正性を獲得していくプロセスとして見たほうが良いと思います。

場合によっては、ある人にとっては、この例ですと、前年度は3位だったので、今年は1位になりたいと練習をし、ひたすら打ち込むことによって、いわゆるシリアスなものに変わっていく過程が見られます。

または自分達がそれにどれだけ投資・投入をして、そしてそれを自分達にとって真正なものに、真正なパフォーマンスに変えていくかとい

うのは人によって、立場によって違ってきます。大きな、メジャーなスポーツの場合は、そこにプロもいるしそのファンたちもいます。ある意味の階層化が進んでいますね。その中で、目標がもう決まっている中で、あるパフォーマンスがアマチュアからよりシリアスなパフォーマンスに深化していくというプロセスが見られることもあります。

これが面白いのは、自分達でいろんな技の工夫を始めて、そしてどんだんのめりこんでいく、ハマりこんでいくという過程が見られるということです。ですから、ひょっとするとある個人にとっては1年をかけて、またはその前の1か月をかけて猛練習をして、それに投入する時間というのは、ほかのジャンルの、たとえばマラソンランナーにも匹敵するものになると思います。そして自分にとってそれを真正化していく、そういう過程にあるものと考えられるので、これは面白いと思います。

今度は私からの質問ですが、先ほどカナダのアルバータ州の話の中でダンスの披露をしていって、それを体験させるという話がありました。その時に、これはそう簡単に真正なものに本当になっているのだろうかと思いました。質問ですが、まず提供者側が本当に何を目的でそのダンスを教えたりしているのか、何を伝えたいのかという、そこがまだ語られていません。自分たちの文化を、まさに私の言葉で言うと「真摯」に伝えようと思っていて、その観光ツアーを提供しているのか、それとも単なる「切り売りの文化」といいますか、伝統の切り売りをしてですね、ただ楽しんでもらえれば、その場を楽しんでもらえれば良いと思って、それを提供しているのか、そこに大きな違いが生じるといいます。

いわゆる提供者側のそれぞれの文脈を、他方の楽しむ側がどこまで理解しようとしているの

かが問題になります。単なるその場限りの楽しみとして、ちょっとだけ経験しようとしているのか。ちょっとだけ経験しようとしている場合は、それは大衆観光、マス・ツーリズムの枠内でのパフォーマンスに過ぎないわけです。ここでは、私が提案する真正な経験、観光者の真正な経験としてそれを持って帰るといようなもの、いわゆる観光者もその提供者の「真摯」な態度をちゃんと自分が受け取って、そして真正なる文化を体験したという、そういう自分の観光体験を真正なものとして受け取って、そして帰っていけるものなのかどうかという、そこがまさに聞きたいところです。

田里：はい、ありがとうございます。提供する側はおそらく教育的な観点から、カナダ社会における先住民の位置づけ、それから存在意義というか、そのようなことは念頭に置いているだろうと思います。観光者側からすれば、先ほど相原さんがおっしゃったように、異文化理解という枠に、ベクトルにいかななくてもいいのではないかと思います。それはもちろん観光者の立場によって変わるであろうし、私が先ほど最後にお伝えしたかったのは、向こう側に行ったという、おそらくそれが先生のおっしゃるマス・ツーリズムの部類に入るのかもしれませんが。向こう側で普段体験しない、むしろテレビの向こう側でのことを、実際に自分が行って、現地の人々と同じようなことを楽しむ。おそらく観光というのは、楽しみを求めているのが第一で、そのあたりはスポーツや遊びと共通する点かと思えます。

そこから、次の教育的な意味づけとしての異文化理解になるかどうか、この点については一つの課題ではあります。それを観光から見てもよいというのが今回の発表で、自分自身で考察を試みたのですが、そこでシリアス／カジュアルという概念で切れるのかどうか、これは今後

の課題となってくると思います。あまりお答えになってないかもしれません。

司会：では、続けて田里先生、相原先生に何かご質問があればお願いします。

田里：私が今日話した地域住民の人たちでも、異なる民族が暮らす地域の話をしてきました。地域住民でもその周辺への観光をすることもあります。今日、先生がお話になったアフリカの舞踊の場合は、アフリカの他の国だとか、あるいは地域とかからの観光客がいるのか、それから日本人以外のどういったところからそのツアーを求めて来ているのでしょうか。

相原：ありがとうございます。先ほどのジャタツツアーズの主催のチビテツアーに関しては、ほとんどお客さんは日本人です。もちろんジャバタンザニアツアーズ(JATA ツアーズ)の主催で、日本に窓口があって募集しているツアーなのでそうなります。ただ、ツアー以外のパッケージについては「交渉してチビテの村に行っている体験できます」とガイドブックで紹介されていますから、ほかの国の方にも窓口は開かれています。

もう1つのアンジバルのDCMAという学校は、完全にオープンで募集していますから、日本人の女性2名以外に参加していた3名の女性の方はヨーロッパから来た方でした。どちらも、幅広く門戸は開かれているという感じです。

司会：少し今登壇者の皆様に議論を重ね合わせていただきましたが、ここからはフロアのみなさんにも3名のご発表を受けて、それから今の議論を受けまして、ご質問等ある方いらっしゃいましたら受けたいと思います。いかがでしょうか。せっかくの機会ですので、何かありましたら挙手をお願い致します。ございませんでしょうか。

では、何か補足されたい先生はいらっしゃいますか。はい、相原先生、お願いいたします。

相原：これまでの話をひっくり返すような話で申し訳ないのですが、先ほどからマラソンを事例にシリアスとカジュアルというお話をされているのですが、橋本先生は、カジュアルの例としてファンランなどに触れておられます。でも例えばコスプレをしてマラソン大会に参加する事例がよくありますよね。記録を求める上では、コスプレなんてしない方が絶対に有利なはずです。でもコスプレして参加している人は、おそらくそれを通じて、例えば SNS で評価されたりすることを目指して、彼らなりに真剣に勝負をしているのではないかと考えています。これは参加者個々人の土俵の違いの問題であって、シリアス、カジュアルと分けてみたけれども、カジュアル側だと我々が思っていた人たちも、実は彼らなりに真剣に勝負しているという側面があるのではないかと思うのですが、いかがでしょう。

橋本：まさにその通りだと思います。チューバをもってフルマラソンを走ったり、コスプレで走っている人って意外と速い人が多いですね。しっかりと走っている。ですから具体的にその人がどういう目標で何をしているかということは、個別のそれぞれの文脈をはっきりさせないといけないということが、まず、第一にあります。そしてその中でその人が何を目的にそれをつけるのか、それをつけて走ることで去年よりも今年の結果がよかったとか、というような形になります。自分に負荷をかけているわけです。

ですから、最初に私がファンランとしてあげた人たちは、だいたい3キロ、7キロとかを走る人たちを主催者側がファンラン走者という風に分類・命名している人たちです。それからもう一つはフルマラソンを走る人たちです。初心者は最初の3キロを目標にします。初心者にとっても、今の様に個別に聞いていけば、その3キロ自体が大変な挑戦になることがあります。

その場合にはその人にとっては、それはまさに何日も準備をして、そこに挑んで3キロなり7キロを、ちゃんと完走したことというのがとても重要なことになる。それはその人にとっての、ある意味でのシリアス・レジャーになっていくだろうと思います。それに対してそれほど準備しないでちょっとだけ、3キロを歩くだけで、一緒に周りの人とお話ししながら、それでもいいという人もいます。それぞれの立場によって違うというのはまさにその通りだと思います。

相原：ありがとうございます。

司会：その場合には、「マラソン大会だからマラソンするもの、記録を自分と戦ってこの間よりも速く走る・・・」というような前提がマラソンにはあると考えられがちですが、ファンランに参加する人たちはそういった類の人間ではない。シリアスに競技に挑んでいる人たちとは異なる枠組みに属している。そもそもファンランの人たちがどういう人たちなのか僕は存じ上げないのですが、最初から「(シリアスな) マラソンなんかどうでもいい」という人もいて、マラソンとは目立って走るための最高の舞台として考えている方たちが多くいるとすれば、またマラソン自体が少し違って見えてくることになるんですかね。

時間がないところ恐縮ですが、以前、相原先生が本シンポジウムの打ち合わせの際に「仕事じゃないんだから真面目にやれっ」というタモリさんの格言をご披露くださったのですがスポーツ自体というか、舞踊もそうかもしれませんが、プロフェッショナルで携わっている方、生業になっている方もいますが、そうじゃなくても、実は「シリアス(まじめに)」に関わっているたちもいらっしゃる。こうなると「シリアス」っていう概念の、「まじめさ」というものがいったいどのようなものなのか。

たとえば、相原先生が研究されているプロレスにおいて、プロレスラーは毎日試合（興業）があるので真面目に試合をできないという。なぜなら怪我しちゃまずいからである。明日も興業があつて最高のパフォーマンスを観客に見せなきゃいけない宿命があるからこそ、真面目にやらないというか、できないような縛りがある、でも彼らは大真面目にプロレスをやっているという、なんかちょっと不思議なお話を聞いたことがあります。相原先生、そのへんを今日の議論に繋がれたら、僕は嬉しいんですけど。

相原：ちょっと、アフリカから全然違うところに話が飛んで行ってしまうんですけど、大阪に日本一のちんどん屋さんといわれている人たちがいまして、その方たちを20年ぐらいつと取材しています。彼らは365日ずっと芸人として生きていかなければなりませんから、その日その日の1つの舞台で完全燃焼して潰れてしまつてはダメなんです。365日ずっと、芸人として仕事をしながらお金をもらって生きていかなきゃいけない。となると、その場で完全燃焼するのではなくて、体重移動などを考えながら、どうやって少ない体力で自分たちのパフォーマンスを見せるのかということに関心が移っていくんです。

ちんどん屋さんって大体6時間くらい仕事するのですが、6時間の仕事をちゃんとパフォーマンスやり続けてクライアントに満足してもらえるかとか、そういうことに関心が行きようになつてきます。そういうところに、これまでのパフォーマンスとは全く違う見方が出てくる可能性を感じて研究を進めております。

司会：シリアスなスポーツというのは、どちらかというところ「完全燃焼」していく美学・美德みたいなものが求められ、たとえば、甲子園における高校野球もそうですし箱根駅伝などもそうです。たとえば肩が壊れても投げ続ける

球児の姿や選手が体調不良に陥り、襷がぎりぎりで繋がらない状況を観たいというか、期待しているというようなところも我々の中にあるかと思えます。

シリアスっていう言葉。橋本先生にお伺いしたいんですけど、シリアスっていうのは、ちょっとひょつとしたら、その言葉自体にもいろいろな複雑な構造が含まれる可能性もあるのでしょうか。

橋本：私が今回提示したのは、アマチュアの枠組を提示しました。今お話になつたのはプロの方の話ですので、プロはプロなりの枠組というか、何かの図が多分出来上がるのだらうと思えます。ですから今回最初に言いましたけれど、プロの場合は別です。スポーツにしても「スポーツ観光」の場合は、シリアス・レジャー、カジュアル・レジャーというレジャーの枠組の中で考察いたしました。プロは職業ですので、余暇やレジャーの枠組の話ではないということで、分けて考えないといけないと思えます。

司会：ありがとうございます。

相原：完全燃焼しないスポーツというところに着目して、こういう話ができればいいかなという風には考えておりましたので、そのような話を聞いてよかつたと思えます。

司会：フロアの方も一度ふらせていただけますか。はい。林先生お願いします。

林 (台湾師範大学);台湾師範大学、林と申します。自分の研究した内容の整理をしたいと思えますけど、シリアス・レジャーは、最初はカナダの学者ステビンス (Stebbins, R. A.) が1982年から1990年代まで、彼がいろんなシリアス・レジャーをやっている人たちを分析したら、6つくらいのインデックスがあると提案された。

それで私の教え子もそれに興味があつて研究していて、私たちの結論は生活の中で、あれを第一にするのは切り分けというか、インデック

スのものになる。ステピنزの理論でそのままやると、めちゃくちゃになる。なぜかという、例えば6つの中に2つだけ青、3つ青、4つ青いろんな場合があって、誰がシリアスか、そういう問題になってきます。

私たちの考えで、生活の中で仕事以外、それを第一にしてプロ並みの意識があれば、レベルがなくてもそれを一生懸命やって、そしたら、もちろんみんなのそういうスポーツ、あるいはレジャーのやる選択肢がいろいろあるんじゃないか、それが第一で、いつも時間があれば、それを大事にすれば、私たち台湾では、それはシリアススポーツマンとか、あるいはシリアス・レジャーをやっている人間として定義しました。

橋本：まさに真正化の問題ですね。ここで問題にしたのは主観的な真正性の問題でありました。ですから、やっている人にとっての真正性というのは、自分にとっての、パフォーマーにとっての真正性の問題でありますので、それは主観的になりますね。ですから、その個人にとって、今ここでも話があったように、たとえば7時間を切れるかどうか、5時間を切れるかというそれぞれの目標達成があります。全部を走れなくても半分をどうやってクリアするかということが問題になる人がいます。そういうパフォーマー個人にとっての真正性の問題を、ここでは問題にしています。

今のお話はシリアスとカジュアルの度合いの問題なのだと思います。これは、二分法ではありません。ですから、シリアスなレジャーの特徴をいくつか出したとしたら、その全部をクリアしなくても、自分にとってはそれにどれだけ関わるかというところで、自分にとってはシリアスの度合が増えていくというふう考えた方がいいと思います。ですから、同じ見解だと思えます。

司会：ありがとうございます。それではそろそろお時間も差し迫ってはいますが、どなたかご質問ある方はいらっしゃいますか。このせつかくの機会です。

そしたら、最後に言い残したことがあれば、一言ずつ田里先生から。なければいい。

田里：観光論のスポーツ研究において、パフォーマーというところに着目しながら見ていくところでは、もし時間があれば今日司会の瀬戸先生が研究されている応援文化と関わらせて、サポーターに注目してみても面白いですね。彼らは転々と応援のために様々な地を訪れる。それはおそらくシリアスだと思います。聖地化というか真正化もされていく行為も多々あり、どこの球場を巡ったというようなことは、あれはまさにファンあるいはサポーター、応援文化というところでも活用できるのではないかと思いました。今日は時間がありませんが、ぜひ司会の瀬戸先生にご発表をお願いしたいと思います。

司会：ありがとうございます。現在、司会者は学生応援団の研究をしておりますが、応援団という存在は競技に関しては他者でありながら、その空間では場面を構成する一つの重要な文化要素となっている、特別で不思議な存在だと思っています。本日は、司会者は話す立場ではありませんので、またの機会に是非お話をさせていただければと思っております。田里先生ありがとうございます。それでは引き続き、相原さんお願いします。

相原：私も瀬戸先生が応援団研究の観点から、このシンポジウムをどうとらえておられるかを聞きたかったので、良かったと思います。

司会：ありがとうございます。では、橋本先生何かございましたら。

橋本：今日はこういう観光とスポーツについてお話しする機会を与えていただいて、どうもあり

がとうございました。ちょっと違う学会でござい
ますが、観光学術学会という学会を立ち上げ
ておりまして、そこでもなかなかスポーツと観
光についての議論というのをまだまだ十分に
できていない状況で、今回お話ししましたよう
なことでございます。まさに人類学は学際的な学
問でございまして、スポーツの人類学的研究や
観光の人類学的研究があります。観光人類学を
専門にしているというふうに主張しております
が、観光の場合は、社会学や地理学、それに経
済学や統計学、マネジメントというような領域
の人々と学際的にやっております。

スポーツと観光もまさに今回のように、一緒
に語ることができる場面というのがたくさんご
ざいますので、これからも、東京オリンピック
が近づいております、我々の観光学術学会の
方も、なんとかスポーツと観光との共同研究、
共同のシンポジウムができればいいと考えてお
ります。私もスポーツ人類学会の会員でござい
ますが、これからもよろしくお願ひしたいと思
います。

司会：ありがとうございます。登壇者の皆さんに
本日お話ししていただいた内容、多岐にわたっ
ているようで実はスポーツの実践において「す
る側、それからそれを見る側、研究する側」は
常に「本物、真正性ってなんだろう」と問いか
けているものだということがわかりました。実

はそこには客観性を担保しようとするのと同時
に当事者たちの主観的な部分が主要構成要素と
して存在し、その光の当て方というか、吟味の
仕方によって可変性があったりするということ
を知りました。あらためて一筋縄ではいかない
ということを知らしめられた感じです。

それと同時に研究する道程においては、スポ
ーツ人類学という枠組みだけでなく観光人類学
もそうですし、さまざまな学際的な知恵がいま
まで蓄積してきた知恵を如何に共有するか、活
かしていくのが重要であることを改めて感じ
ました。

そういったものを我々がこのような機会を活
かし、自身の知識を増やしながら各々が現在取
り組んでいる領域や、その親学間に貢献できる
ようなことができたならば、このシンポジウム
が、その一つのきっかけになれば私どもは嬉し
いところでございます。本日はパネリストの先
生方にたくさんの知恵をいただきましたので、
きっとフロアの皆さんはその知恵を手に戻っ
ていただけるのではないかと存じます。皆さんの
フィールドでその知恵の種を蒔いていただき、
新たな発想を育てていただければ幸いです。

それでは、あらためて本日ご登壇いただきま
した橋本先生、田里先生、相原先生に拍手を送
っていただければと思います。皆さんどうもあ
りがとうございました（パチパチパチ）。